

troop. In *Contemporary Primatology*, S. Kondo, M. Kawai and A. Ehara (eds.), Karger, Basel. pp. 423-427

学 会 発 表

- 1) 幸島に生息するニホンザルの排泄寄生線虫卵の季節的変動ならびに駆虫試験について

堀井洋一郎・森 明雄

第20回プリマテス研究会(1967)

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林施設設置の準備段階として、特別事業(下北)によって下記の調査研究および折衝が行われた。

1. 長野営林局と話し合い、上信越地方における研究林予定地について相互の了解に達した。

2. 下北半島: 1) 主として食痕、糞内容と直接観察から、年間の食物の季節変化と採食行動の資料を集積記録した(和田久他との共同研究2年計画の第1年)。2) これまで知られた約60地点の泊り場について林分構造、植生のなかでの位置・地形的特性の調査を進めるため、初年度として調査記録の検討をおこなった(森治他との共同研究)。3) ブナ・ヒバ林の択伐的施業と更新の過程を永久クオドラート(40×40 m²)を設けて追跡調査した。択伐天然更新の造林技術的解析と、それにともなっておこる森林植生のサルの生息環境としての変化の予測を行なうことを目的としている。4) 冬期12月~3月(63日間)にわたって、M群の遊動の連続追跡をおこなった。積雪期の土地利用、遊動の性質、遊動生活への気象積雪状態の影響、冬期の泊り場のえらばれ方など遊動と環境構造、遊動と群れ社会の関係を考える上で、基本的なデータがえられた。なお、これまでの調査で、M群については、森林の林分構造と過去の施業のあり方が、遊動ルートと泊り場の選択に与える影響をある程度まで明らかにした。これは、今後、ニホンザル個体群の生活維持と森林施業のあるべき姿、とを考えると重要な知見である。

3. 屋久島: 1) 集中調査(第3次)、1975年7月16~8月15日(31日)にわたり、12名(増井憲一、福田史夫、田中晋、小倉進一、斉藤、桜井道夫、菅牧子、渡辺邦夫、J. Burton、丸橋珠樹、足沢貞成、東滋)による共同調査をおこなった。目的としたのは、研究林予定地を中心とする地域個体群の現状と動態を、継続的につかむことであった。(a)永田一瀬切間の西部林道ぞい、国割岳斜面の国有林(下屋久営林署1~6林班: 研究林予定地)、(b)それに隣接する民有林、(c)国割岳西北稜(上屋久営林署)を対象に調査した。全域について群れの分布、群れ

の大きさをおさえた。A、Bの4群については、性・年齢構成・遊動・群間関係・遊動時のグルーピングなどについてくわしい調査がなされた。

以上は、増井憲一他との共同利用研究計画と研究林特別事業とを中心にして、企画実行された。2) 丸橋珠樹がK、O群について、6月、10月、12月、2~3月の通年の生態学的調査をおこない、自然群のhabituationのもとに、遊動と土地利用の季節変化の研究をおこなった。

報 告 そ の 他

足 沢 貞 成

- 1) 畑に被害をおよぼすサルの対策について

一青森県下北群脇野沢村九艘泊の群れを例に—
〔雑誌にほんざる I, 1974〕

- 2) 北限にて思う〔モンキー No. 143 1975〕

- 3) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(I)
〔モンキー No. 144 1975〕

- 4) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(II)
〔モンキー No. 145 1975〕

大学院学生

昭和50年度における京都大学大学院理学研究科動物学専攻霊長類学分科の学生、指導教官および研究テーマはつぎのとおりである。

氏名	学年	指導教官	研 究 テ ー マ
佐藤 俊	D 2	河合雅雄	ケニア北部に住むレンディーレ族の遊牧生活に関する研究
渡辺邦夫	D 2	川村俊蔵	シシバナザルの社会行動
B・S・グレワル	D 1	河合雅雄	ニホンザルにおける活動様式と社会関係の量的研究
雫石邦義	D 1	川村俊蔵	モズの社会行動
菅原和孝	D 1	河合雅雄	ニホンザル自群然における青年期オスの成長にともなう社会関係の変遷に関する社会学的研究
J・ブルトン	D 1	川村俊蔵	ニホンザルの Clustering に関する比較行動学的研究
松村道一	D 1	久保田競	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の分析
十川和博	M 2	高橋健治	霊長類の組織タンパク質の分解機作の研究
浜田生馬	M 2	久保田競	霊長類行動発現機構の神経生理学的研究